

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

父と子と友人 ・ 隣人の話

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江口, 一久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001817



父と子と友人・隣人の話

201 目のみえない人がどうして、学生に世の中の ことをおしえたか

ある人がコーランを勉強している。学生は野原で目のみえない人が縄をなっているのをみつけた。学生は、「おまえさんは、ここになにをしているのか」といった。目のみえない人は、「わたしは勉強をしている」という。学生が、「おまえさんは世の中のことをみんな勉強しているのか」といった。目のみえない人は、「世の中のことをみんな勉強できるか」といった。学生が、「アッラーよ、ゆるしたまえ」という。

さて、ある日、学生は自分のとまっている屋敷にかえった。人びとは食事をしている。屋敷の主人が、「きょう、わたしのロバが家にかえってきていない」といった。学生が、「正午に、わたしはロバに水をのませたけれども」といった。屋敷の主人が、「おまえさんは、ひどいことをした。おまえさんがロバに水をやらないなら、家にかえってきているはずだ。おまえさんがロバに水をのませて、ロバが家にかえってこないというのは、おまえさんがロバをうってしまっただからだ」という。屋敷の主人と学生は三日のあいだ、さわいでいる。人びとは、「たちあがれ、すわれ」などいつている。学生はでかけられなかった。学生はかんがえた。屋敷の主人はでかけていき、しばらくすると、学生をうったえた。屋敷の主人は、

「こういうことで、あの学生はわたしにひどいことをやってくれました。学生はわたしのロバをうってしまいました。学生はロバに水をやったといいますが、ロバは家にかえってきていません」といった。学生は五日の期限をあたえられ、ロバをさがすことになる。学生は五日のあいだロバをさがし、家にかえってこなかった。学生は目のみえない人のことをおもいだした。

さて、学生は目のみえない人のところにいつて、「だれそれよ、わたしはこの五日のあいだ、おまえさんのことをかんがえていたが、おまえさんのいったことがわからなかった。問題がおこった。わたしに、この世の問題がおこった」といった。目のみえない人が、「どうしたのか」という。学生は、「わたしは、わたしのとまっている屋敷の主人のロバに水をのませた。そのロバがきょうまで、家にかえってきていないという。とうとう、屋敷の主人はわたしをイスラム教の裁判にうったえた。わたしはどうしてよいのかわからない。そこで、わたしはおまえさんのことをおもいだした。そういうことで、わたしはおまえさんのところにきたのだ。おまえさんはそう腹をたてていないようだから」という。目のみえない人が、「ここに縄がある。いつて、足繩（家畜の足と足とをつなぎあるきまわらせないための繩）をつくりなさい」という。学生は足繩をつくった。足繩は丈夫になった。目のみえない人が、「おまえさんがみつけたロバならどのロバでもよいから、その足に足繩をつけて、

裁判をする人のところにつれていきなさい」といった。

さて、学生はあるロバをみつけ、すぐに、足縄をつけた。ヒヨッコン、ヒヨッコン、ヒヨッコンとロバを裁判をする人のところにつれていった。学生はロバをつれて、たちどまった。裁判をする人が、「どうしたのか」という。学生は、「さがせといわれていたロバのことです。わたしはこのロバに水をのませました」といった。裁判をする人は、「そうか、よろしい。ロバの持ち主をよんで、こさせなさい」という。ロバの持ち主がやってきた。ロバの持ち主が、「どういうことですか」という。裁判をする人が、「そこにロバがいる」という。ロバの持ち主が、「このロバではありません」といった。裁判をする人が、「よろしい。この人はこのロバに水をのませたのだ。おまえさんは、その話をやめて、いってしまえ」といったとさ。

(一九八三年一月一九日、語り手 ハンマドゥ・ハマ・ガーブド、
ガウンデレにて)

202 二人のおなじ名前をもつ人

わかるな。女と男がいた。わかるか。女と男は愛人の仲だった。男は女に、「こういうことをする約束をしておこう。わしはおまえが小屋のなかで男といっしょにいるのをみつけたら、わしはおまえ

をころす。ここに短刀がある。おまえにやる」という。それで、女は男に、「わたしも、おまえさんがべつの女といるところをみつけたら、おまえさんをころしてやる」といった。

さて、女は短刀をとり、男にやった。女が男とべつの女がいっしょにいるのをみつけたら、男をころすのだ。男は短刀をとると、女にわたした。男が女とべつの男がいっしょにいるのをみつけたら、女をころすのだ。女が男とべつの女がいっしょにいるのをみつけたら、男をころすということだ。

さて、男は自分の短刀をといでいる。ある日、男はまるで旅にくようなふりをして、かくれていた。男がやってくる、女はべつの男といた。男は女のところに来ていた男をつかまえて、ころしてしまつた。男はその男をころしてしまつと、にげていった。女はいくと、そとにすわつた。

さて、事件がおこつた。老女が大声をあげた。人びとは王さまをよんだ。ほんとうのこと、この女は王さまの娘だった。人びとは、「これはだれがした。これはだれがした」という。男はにげていき、かくれた。

さて、人びとは男をころしたのはべつの人をつかまえた。人びとは、だれその仕事ではないか、だれその仕事ではないか、だれその仕事ではないか、その人をころしてしまえといつた。

さて、人びとはこの人をつかまえて、この人をころそうとした。

人びとがあつまつた。

さて、濡れ衣をきせられた人が、「おまえさんたち、まっっておくれ。ここにハンマンというわたしとおなじ名前をもっているものはいないか」という。人びとはみんなだままっている。一人だけが指をあげた。濡れ衣をきせられた人は指をあげた人に、「よろしい。おねがいだ、おなじ名前をもつ人よ、アツラーにかけて約束する。ごらんのとおり、わたしはしばられている。わたしはころされかけている。さて、この繩をうけておくれ。わたしはいつて、わたしの家族に別れをつけてくる。わたしはかえってきて、ころされる」といった。指をあげた人は、「よろしい」といった。ハンマンはやってくると、繩をうけた。ハンマンが自分のかわりに繩をうけたので、濡れ衣をきせられた人は自分の村にいった。ほんとうのこと、この人の父親には財産があり、息子にお金など、この世にないもの以外、やらないものはなかった。濡れ衣をきせられた人がころされる日がやってきた。王さまは、「あの人がこないなら、このハンマンをころせ。ハンマンは手をあげて、繩をうけたではないか。ハンマンはあの人のことが気にいっていたな。ハンマンはそれをうけいれるな」という。

さて、人びとがハンマンをころしかけると、ほんとうにころした男が、「やめておきなさい。あそこに埃がやってくるのがみえる。ひよっとしたら、あの人がくるのかもしれない」といった。

しばらくすると、濡れ衣をきせられた人がやってきて、繩をうけとり、自分もってきたものをとると、すべて自分の代わりになつてくれていたハンマンにやつた。人びとが濡れ衣をきせられた人をころそうとした。

さて、ほんとうにころした人があらわれて、「おまえさんたちはなにもしていない人をころすのか。わたしがやったのだ」といったとさ。

この話はおしまい。

(語り手 一九七一年一月二日、パーセーウオ村出身のアップ
ドゥッラーイ・オスマース、マルアにて)

203 どうしようもない人

さて、この話はどういうこと。ある男がいる。男がいる。男のほかにたくさんの人がある。男は友だちといっしょだった。

さて、男は人のいうことをきいている。いま、だれかが、「人の邪魔をしてはならない。仕事をするな。おまえさんがそのおおきさになつたときまで、まちなさい。勉強をするときになったら、勉強しなさい」という。

さて、こういうことなのだ。男の友だちが男になにかいう。でも、男はそれをしない。男は目のまえにあることをする。

さて、この人たちはそのようにしながらすんでいた。

さて、人びとがあつまつた。たくさんの人だった。男は矢をいれることもできなかった。ほかの人たちはできないことがなかった。男は野原にいった。そこに男がいて、そこにアフリカクロスイギウがいる。そのアフリカクロスイギウはわしらがつくという類だった。そこに男がいて、そこにアフリカクロスイギウがいる。男はそのアフリカクロスイギウをたちあがらせた。男は大声をあげて、歌をうたっている。男は自分の母親をよんでいる。

「母さん、母さん、いそいでおくれ」

男は自分の姉さんではなくて、自分の母親にいそいで、自分をたすけておくれといった。男はいう。

「母さん、母さん、いそいでおくれ。」

いこうか。

母さんよ。

母さん、やっけてきておくれ。いっしにすもうか。

母さんよ」

男はこのように大声をあげている。男は野原の獣といっしょにそのへんをまわっている。男は自分と野原の獣がどこかにいってしまったので、自分の母親にいそぐようにといった。男の母親はいそいでやってきて、男をたすけようとする。男と野原の獣はそのへんをまわった。男と野原の獣はそのへんをまわった。とうとう、野原の獣は

つかれて、死んでしまった。男は獣をひっぱって、家にかえつてきた。男はその獣をころしたといった。男は家にかえつた。男は結婚した。男はよめさんという。こういうことだ。男のよめさんのもとと野原の獣で、人間の姿になっていたのだ。男はよめさんのことがわかった。男が料理しないわけにはいかなかった。男がそのよめさんをもらつたのだ。男が料理をつくり、それをもつてきて、男とよめさんはそれをたべる。二人はいっしょにいる。男が料理をし、それをもつてきて、二人でそれをたべるのだ。さて、二人は野原にいた。

ある日、男がよめさんという、よめさんはいくと、もとの獣の姿にもどり、きていたものをぬいで、あらわれた。野原の獣は、男をつかまえた。二人はいつてしまった。男はいう。

「母さん、母さん、いそいでおくれ。」

いこうか。

母さんよ。

母さん、やっけてきておくれ。いっしにすもうか。

母さんよ」

男はどこにいても、母親のことしか頭になかった。男は川にはいっても、水にはいっても、母親の名前をいう。水からでも、母親の名前をいう。(男は野原の獣のところからにげる。)

さて、とうとうある日、男がこのようにしてすわっていると、男

の友だちが男をよんだ。

さて、男はでかけていった。男は友だちのところにてかけていった。男はよばれたので、それにこたえたのだった。

さて、男の友だちはパーティーをした。すなわち、食事に招待したのだった。男はいつて、食べ物をつたべて、家にかえつてきた。

さて、男はなきだした。男は仕事をさがす。男が仕事をさがしているときに、男の力はなくなつていた。男に力があるとき、人びとは男におおきくなるまで、まてといわれた。

さて、この話もおしまい。すなわち、この男はこの世でなにもしない人だ。この男はじつとしていて、アツラーがしてくださるのをまつだけで、アツラーを信じて、なにもしないでいる人の類だ。アツラーがおまえさんについて、それをしなさいなどとおっしゃるだろうか。アツラーがおまえさんのする仕事をくださるだろうか。わかるな。おまえさんは一生懸命にやるだけだ。そうすれば、なんでも手にはいる。アツラーにもらうだけではいけないのだ。

(一九八三年一月二三日、語り手 アーマドウ・ルフアイ、ガウンデレにて。この話は友人からきいたという)

204 イスラム教の教師の息子と貧乏人の息子と金

持ちの息子

ある老人がいた。この人はイスラム教の先生の類だった。先生は自分の息子とくらしている。イスラム教の大先生の息子と貧乏人の息子と金持ちの息子がいっしょになり、友だちになった。

さて、ある日、三人は出発した。三人は野原をあるいていく。いつも、三人はそれとはしらないで、三人の精霊の娘と知り合いになった。三人はその娘のところいき、そこで、夜、あそぶ。三人はそこについて、夜、あそぶ。ほんとうのこと、この娘たちは精霊だった。三人はしらなかつた。ある日、三人は夜、日がくれたあと、そこにでかけていった。真夜中になった。三人はそこにいて、精霊たちのところで、夜るときをすごした。三人は女の正体をばらしてやろうとする。イスラム教の先生は自分の息子にお呪いをやった。

さて、貧乏人の息子は風のようにかけることができる。金持ちの息子はだれにもまけないほどのうまいやり方をつかうことができる。お金で相手をごまかすことができるのだ。金持ちの息子は相手をごまかせる。そうして、自分はにげていく。

さて、イスラム教の先生の息子はとびたいとおもえば、とべる。なんでも、やりたいことができる。三人はいっしょになって、精霊

の娘たちのところに行く。三人はどんとあるいていき、そこで、夜遊びをして、家にかえってくる。

さて、精霊たちは三人を道で待ち伏せをしていた。おそろしい精霊が三人を道でまっていた。

さて、先生の息子が、「貧乏人の子よ、はしっていつてしまえ。きみは、あの村に行くのだ。村にいたら、きみはおきみの小屋のなかに豆をこぼすのだ。ついたら、ここに豆があるから、この豆をまきなさい。まくと小屋のそとにでろ」といった。貧乏人の息子はそれをきくと、もらった豆の半分を精霊の子どもたちのそばにまいた。貧乏人の息子は豆を精霊の子どもたちのそばにまくと、自分は精霊の子どもといっしょにはしるといった。精霊の娘たちは三人にずっとそこであそばうとあった。貧乏人の息子ははしっていき、家にかえってきた。家にかえると、よこになって、ねてしまった。貧乏人の息子はガウンデレにある軍隊の兵営からマイガンガぐらいの距離をはしっていった。

さて、貧乏人の息子は家にかえって、よこになった。貧乏人の息子は夜遊びがたのしかった。貧乏人の息子はそこにもどっていきなくなつたので、はしって、もどっていった。いくと、腰をおろして、かくれて、二人の友だちと精霊の娘たちの様子がはなすのをきいている。そのあと、二人が金持ちの息子のうまいやり方をつかっ

がって、わらった。精霊の娘たちはそれをみて、二人をおいはらった。貧乏人の息子ははしっているが、その足はうかんているように草などをふむことがない。精霊たちはあつまって、貧乏人のあとをおつていく。先生の息子は我慢できなくなつて、お呪いをとなえると、カバの皮でできたムチをもち、ムチをふると、精霊たちをつ。先生の息子はムチで精霊をうつ。

さて、先生の息子ははしっている。

さて、精霊たちははしっている。

さて、精霊たちは先生の息子の友だちをおいはらいはじめた。友だちはどんとんはしっていくが、精霊たちは自分たちのまえにいる。

さて、先生の息子がやってきた。先生の息子は自分のムチをもつてやってくる。精霊たちのまえにたちはだかつた。先生の息子はお呪いをとなえると、ムチに唾をはきかけ、ムチで精霊たちをどんとん打つていった。先生の息子は精霊たちをころしてしまった。先生の息子は家にかえつていった。先生の息子が家にかえると、かねもち息子はたちあがり、人びとをよびよせて、先生の息子をおそうようにといつた。金持ちの息子は、先生の息子のムチをとり、自分も精霊をうつつもりなのだ。金持ちの息子がやってきた。金持ちの息子は人をひきつれており、その人たちに先生の息子をたたかせようとしたので、先生の息子はそれがわかつたので、ムチをとると、

金持ちの息子にわたした。金持ちの息子の家族は金持ちの息子に精霊のところに行って夜遊びをするなどといった。家族はそれをやめさせようとした。こういうことだ。金持ちの息子は家にかえってきかた。母親は息子にそんなことをするなという。息子はそれをきかない。母親は、「夜遊びをやめなさい」という。息子はそれをきかない。みんなは、「いくのをよしなさい」というけれども、息子はいつこうにきこうとしなかった。わかるな。息子は家族のいうことをきかなかった。息子はたちあがった。人のいうことはなにもきこうとしなかった。

さて、ある日、みんなは息子に夜遊びをするなど、何度もいった。息子は先生の息子からもらったムチがただのムチだとはしらない。息子はムチに唾をつけて、やってくる。息子はこうしてやってくる。精霊たちを打とうとする。悪霊がこの若者をつかまえて、ころしてしまった。わかるな。この若者は人のいうことをきかなかったではないか。しなくてもよいのにしてやろうとして、そこにいき、自分でころされてしまった。

さて、貧乏人の息子は先生の息子とよろつくのよせといわれた。先生の息子のほうが、上手だった。

さて、貧乏人の息子はたちあがると、先生の息子のあとをあるいていった。先生の息子はあるいていくと、精霊たちと、ふつう話をするのおなじように、話をしている。貧乏人の息子は精霊の女が

すきなので、その女のこと、先生の息子とあらそうといった。先生の息子は貧乏人の息子が自分とあらそうのをやめさせた。

さて、精霊の女のむこさんがかえってくると、そこに先生の息子と自分のよめさんがいた。先生の息子と精霊の男は野原で、おったり、おわれたりした。

さて、精霊の男は先生の息子をつかまえて、なぐり、その足を駄目にした。この話は、すなわち、「人がおまえさんについていることをきき、理解しなければならぬ」ということなのだ。

(一九八三年一月二三日、語り手 アーマドウ・ルフアーイ、ガウンデレにて。この話はモコロにて、マルアからやってきたイスラム教の教師の妻からきいたという)

205 ルバとウマをもっている人

ある女がいた。女はたちあがり、野原にいった。女は子どもをつれて野原のまんなかに入った。

さて、子どもは小便がしたくなった。子どもを背中からおろした。

さて、だれかがウマにのつてやってきた。人がやってきた。

さて、この人はこの女のことをわらっている。この人はルバのことをわらっている。この人はルバのことを何度もわらった。

さて、そのあと、ルバはたちあがった。たちあがると、腹をたてた。ルバが腹をたてると、ルバをわらった人のウマ（人をのせたまま）は土のなかにうずまっついていく。この人のウマはほとんどうずまっついていった。とうとう、ウマのっている人の胸くらいまでうずまっ

た。

さて、この人は大声をあげていう。

「わたしのルバよ、わたしを土からだしておくれ。」

わたしのルバよ、わたしを土からだしておくれ。

わたしはわるいことをした。わたしはわるいことをした。わたしのルバよ。

わたしのきれいな人よ。

わたしのルバよ、わたしを土からだしておくれ」

この人がこのようにいっている、だんだん土からでてくる。

さて、ルバはこの人に、「よろしい」といった。女はいくと、自分の子どもの小便の始末をする。子どもが小便をしたところの土をとり、それをもつ。女はおきあがった。

すなわち、だから、自分のしらないものに迷惑をかけてはならないということだ。女はその人に、自分たちの指のおおきさはおなじではないという。わかるな。それぞれの指のおおきさはちがうではないか。

さて、こういうこと。このお話は、おしまい。

（一九八三年一月二四日、語り手 アーマドゥ・ルファアイ、ガウンデレにて。この話は、おじの友だちからきいたという）

206 自分の息子のよめさんをぬすんだ王さま

お話、お話。

ある王さまはよめさんたちをめとった。王さまには、男の子が一人しかうまれなかった。女の子はこんなにたくさんいた。娘たちはみんな結婚をしてみたい、あとにのこるのは、男の子だけとなった。男の子はおおきくなっていき、一人前になったけれども、父親は息子によめさんをめとってやらなかった。息子の幼友たちはみんな結婚して、結婚していいのはこの息子だけになった。

さて、王さまは太鼓をたたかせた。娘たちがみんな王さまの屋敷のまえにあつまつた。王さまは自分の息子に、娘たちをみるようにといった。王さまは息子に、その娘たちのうちいちばんきれいなものと結婚させてやるといった。息子はよくみて、いくと、気に入った娘をつれだした。

さて、父親は、「なんだって、おまえはこの娘がすきなのか」といった。父親は結婚に必要なものをみんなだして、娘をもらって、息子のところに嫁入りさせた。父親は娘のために屋敷を半分わけてやった。息子は自分のよめさんとすんでいる。息子はながいあいだ

自分のよめさんといった。じつは、王さまは自分の息子のよめさんがすきだった。王さまは息子のよめさんのところにいく。息子が幼友だちとあそびにいくと、王さまはこっそりと、息子のよめさんのところに行く。王さまは息子のよめさんにはなしかけるが、息子のよめさんは王さまに話をしようとしなかった。この娘はよい人だった。

さて、息子がかえってきて、三日ほどたつと、王さまは息子を旅にだす。息子がでかけていく。王さまは息子のよめさんのところにいつて夜るときをすこす。女は王さまをうけいれるようになる。息子がかえってくると、よめさんはむこさんに、どういふことがおこっているのかという。息子は、「よろしい」といふ。父親はなんとかして、息子をころしてしまおうと、いろいろな方法をかんがえるが、ころせなかつた。王さまは、「わしは、あさつて、略奪戦争にでかける」といふた。人びとは、「よろしい」といふた。

そのつぎのつぎの日になつた。人びとは太鼓をたたいた。人びとはみんなウマにのつた。奴隸も、自由人も、王さまもみんな略奪戦争にでかけていふた。投げ槍をもつものも、オノをもつものも、ウマにのつているものも、剣をもつているものも、おおきな刀をもつているものも、棍棒をもつているものも、矢筒をもつているものも、足であるいっているものも、戦争にいふた。みんなどんどんすすんでいふた。人びとは一ヶ月はあるきつづけた。人びとは戦争をす

る。戦争がおわつた。戦争がおわると、人びとはかえってくる。人びとは自分たちが手にいれたものをさきにあるかせ、かえってくる。人びとは野原のまんなかについた。人びとは喉がかわいた。

さて、野原のまんなかにな、どうしようもないほどふかい井戸があつた。じつは、王子が戦争にでかける日、よめさんは王子のポケットにナツメヤシの実を三ついれてやつたのだつた。

さて、王子は指にあかい指輪をしていた。

さて、王さまはそこでたちどまり、喉がかわくといふた。

さて、奴隸たちは木をきり、井戸の入り口のうえにおく。奴隸が井戸にはいろいろとすると、王さまは、「なんだつて、わしの息子がする仕事だ。息子がいふ」といふた。すわなち、王さまは息子をころし、家にかえつて、息子のよめさんをもらおうとしているのだつた。王さまは、「息子がいふ」といふ。人びとは、「なんですつて、王さま。わたしたちがいふのに、あなたの息子さんがこんなにふかい井戸にはいるといふのですか。わたしがはいつて、水をくんであげましょう。アツラーがあなたにいいことをしてくださいすように。わたしがはいつてあげましょう」といふ。王さまは、「息子にはいらせろ。息子がいふ。あいつが、だれだとおもつているのか。あいつは、不信心ものだ」といふ。

さて、息子はウマからおりて、どんどん井戸のなかにはいつていふた。井戸にはいつていき、水をくんで、みんなにわたした。人び

とはみんな水をのんだ。息子がそとにでようとすると、王さまは木をひっぱれといった。人びとが木をひっぱりあげ、息子を井戸のなかにのこした。井戸には水がおおくなかった。人びとは息子をそこのこした。

さて、人びとはもどつていき、村にかえつてきた。人びとはおおきな石をもつてきて、井戸の口をふさいだ。よこに、すこしだけ、隙間がのつた。息子はそこにいる。この井戸はふかい。井戸からでる方法がなかった。息子はそこにいる。人びとは村にかえつてきた。王さまはさつそく、奴隷たちに、「だれでも、息子が井戸のなかにいるといったものは、ころす。おまえたちはきかれたら、息子は死んでしまったといえ」という。

さて、奴隷たちは、「わかりました」といった。人びとは村にいった。だれかが、「王さまはどこにいるのか」ときく。人びとは、「死んでしまった」という。だれかが、「王さまはどこにいるのか」ときく。人びとは、「死んでしまった」という。よめさんは一晩中大声をあげてなく。一晩中大声をあげてなく。父親はいつも、息子のよめさんのところにいき、息子のよめさんと話をつけ、結婚しようとした。女はそれをこぼんだ。いつも王さまはそのようにする。ほんとうのこと、王子が井戸のなかで、ポケットのなかをみると、ナツメヤシの実がはいっていた。王子はナツメヤシの実をとると、それをたべて、その種を井戸のなかにすてた。ナツメヤシの種

が三つとも芽をだし、おおきくなっていく。王子は井戸のなかにいる。王子の頭の毛はどうしようもないほどのびてきた。王さまは、息子のよめさんのところにいくが、はじめは、息子のよめさんにこばまれた。しかし、そのうちに、うけいれてもらうようになった。息子のよめさんは王さまと結婚した。村の人たちはみんな王さまのことを、「なんだつて、どういふことだ。父親が息子のよめさんをおうばうとは」といった。そのうちに、ナツメヤシの木はどんどんおおきくなっていくが、井戸の口からそとにでなかった。

さて、狩人がいて、一ヶ月の半分は野原で獲物をさがしている。狩人は喉がかわいたので、井戸にやつてきた。狩人は毒のあるものほか、なにも野原にはたべるものがなかった。狩人は井戸にやつてきて、水をのもうとした。

さて、狩人が井戸のなかをみて、「アッラーよ、どうして水をくもうか」といった。

さて、狩人がみてもみると、井戸のなかに人がいた。

さて、狩人は、「アッラーは全能なり。こんなところに人がいるとは」といった。

さて、狩人はいくと、木をきった。狩人はやつてくると、木に繩をしばつていった。狩人は石をのけて、若者に、「これをもちなさい」という。若者は繩をつかんだ。狩人はどんどん繩をひっぱつていく。若者は井戸の壁をふみしめ、とうとうでてきた。若者がでて

くると、狩人は若者を井戸のそとにおらせた。狩人はどこかにいつてしまった。狩人はそのへんをうろつき、ダイカーをとり、もってきた。狩人はダイカーの皮をはぎ、その肉をやいた。狩人はそれを若者にやった。若者はそれをどんだべていった。狩人は若者を野原につれていった。狩人はそこに仮小屋をたてた。二人はそこにいる。狩人はいつも、獲物をとりにいき、若者に獲物をもつてかえってくる。狩人は若者の髪の毛をみんなそってしまった。若者はこえはじめた。狩人は若者がはいつていた井戸にいき、若者に水をくんでやり、若者にやる。若者はその水で水浴びをする。そのうちに、若者は元気になってきた。狩人は若者に、「さて、おまえさんはどうして、家にかえつたらよいだろう」といった。若者は狩人に、「これから、わたしは家にかえる準備をする。おまえさんが村にいくとき、村にいつても、なにもいうな。おまえさんは鍛冶屋をさがし、剣を二本と槍を二本もつてきておくれ」といった。狩人がいくと、鍛冶屋は剣を二本と槍を二本つくつた。狩人はそれを若者にもつてきた。若者は、「よろしい」といった。若者はいくとそこにいた。若者は剣と槍をそのままにしておいた。狩人は服をぬぐと、若者にわたした。若者はそれをきた。若者は槍をおいておく、村のちかくにいつた。

さて、王さまの子どもたちは子どもの奴隷たちをつれて、牛乳をしほりにいき、王さまの屋敷にもつてかえってくる。王さまは息子

のよめさんとすきなことをしている。

さて、子どもの奴隷たちが牛乳をしほり、家にかえつていく。家にかえつていくと、そこに若者がたつていた。子どもの奴隷たちのなかに一人ちいさな男の子がいた。ちいさな男の子は若者の父親が若者に結婚させたときから、よめさんがそだてていた。

さて、若者は、「わたしに牛乳をおくれ。のむのだ」といった。ちいさな男の子は牛乳をもつてきた。若者はその牛乳をどんだべていき、息をつくと、牛乳をうけとり、どんだべのみ、息をつくと、牛乳をうけとり、牛乳をみんなのんでしまい、満腹した。若者は指輪をぬきとると、「この牛乳はだれのところにもつていくのか」といった。ちいさな子どもは、「この牛乳はだれそれという女のところにもつていく。ほんとうのこと、その女はきれいだ。王子さんがめとつたのに、父親が横取りをした女だ」といった。若者は、「だが、その女と結婚したのだ」といった。ちいさな子どもは、「王さまだよ」といった。若者が、「王さまか」という。ちいさな子どもは、「王さまだよ」という。

さて、若者は指輪をはずすと、ちいさな子どもが頭にのせていた牛乳をいれた半截ヒョウタンのなかになげこんだ。若者は、「これをもつていつても、なにもいわないように。だれかが、おまえさんにこの指輪の持ち主にどこであったかとなすねても、なにもいわないように」といった。子どもは、「わかった」といった。子

どもは、牛乳をもってかえった。女は牛乳を王さまのためにあたためている。女が牛乳をべつの容器にあげた。女がいくと、半截ヒヨウタンの底に指輪がころがっていた。女はアツというと、なきはじめた。王さまの家のものたちが女に、「どうしたのか」とたずねる。女は、「べつに」という。王さまの家のものたちが、「どうしたのか」とたずねる。女は、「べつに」という。それから十日たつと、女は子どもに、「おまえはその人とどこであつたのか」とたずねた。子どもは、「わからない。ひよつとしたら、指輪はウシからでてきたのかもしれない」といった。子どもは女にそのようにうそをついた。

さて、それから十日たつた。王子は自分の武器をみんなもつと、日暮れどき、村のちかくでかくれていた。日暮れどき、王さまが一人であるときをみはからい、屋敷のなかにつかつかとはいっていくと、「平安、なんじらにあれ」と挨拶をした。王さまはカユをのんでいたが、それをうけて、「だれだ。だれだ」といった。王子はやつてくると、王さまをグサツとさした。王子は王さまをグサツとさした。王子は王さまの喉をかききつた。

さて、王子はそこからはなれた。王子はおちついた。こうして、王子は王さまになり、自分のよめさんを取りかえしたとき。

お話は、おしまい。ウサギの糞の蒸し焼きができた。

(一九六九—七〇年、語り手 パーサーウオ村出身のアブドゥッ

ラーイ・オスマーン、マルアにて)

207 娘をはらませた父親

さて、アツラーの名前によつてはじめる。先生よ。

こういう話もある。いまの時代というのは、わけのわからない世の中だ。わたしは、ほんのすこしおまえさんにいいたいことがある。わかるな。この世の中では、ある人たちはたいへん欲がふかい。そういうことなのだ。ある娘が父親の屋敷でそだち、年頃になつた。

さて、娘は結婚してよい年頃だつたけれども、最初の結婚もしていなかった。

さて、人びとは娘をくれといった。

さて、そのうちに、娘のお腹がおおきくなつてくるのがわかつた。娘はお腹がおおきくなつた。

さて、母親は娘をといつめ、「娘よ、わたしはおまえの体に変化がおこっているのがわかる。だれに、お腹をおおきくしてもらつたのか」という。

さて、娘は、「いいや、母さん、わたしはお腹がおおきくない」という。母親は、「おねがい、娘よ、わたしにいつておくれ。おまえがいつてくれないと、だれがいうのか」といった。娘は、

「なんだって、母さん、わたしはお腹がおおきくない」という。

さて、人びとは娘のお腹がでてきたのを見た。

さて、人びとは娘をつかまえて、王さまの屋敷の入り口につれていった。王さまたちは、「娘よ、こういうことを、だれにもきかれないようにして、おまえさんにいう。わしらは、おまえさんの子に父親がいることをしている。そこで、おまえさんのお腹がでてきた。おまえさんは、はじめの結婚もしていない。おまえさんは、お嬢さんだ。それで、それはどういうことか。わしらにいつておくれ」といった。娘は、「なんですって、王さま。いいようがありません」といった。王さまは、「なんだって、わしらにいつてくれないうなら、わしらはおまえさんをころしてしまふ。奴隷たちよ、たちあがれ。不信心ものをうて」という。奴隷たちは杖をもった。王さまの家来たちが、「わしらにいえ。いつてくれないと、おまえさんをころす。というのは、おまえさんが不信心ものだからだ」といった。そのようなことは、そうすることになっている。

さて、娘は、「みんながわたしをくるしめています。でも、あなたにたがたにいうと、はずかしいのです」といった。人びとは、「はずかしくても、いいなさい。はずかしいとはどういうことか。おまえさんの体にできてはよりはずかしいことがあるか」といった。

さて、娘は、「わたしのお腹がおおくなったのは、父親のせい

です」といった。王さまたちが、「おまえさんの父親がおまえのお腹をおおきくしたのか。それは、はずかしいことだ。どういうことだ」という。娘は、「どうしてはじまったかという、母親が川にでかけていきました。母親がでていくと、父親は娘よ、わたしに水をおくれといいました。わたしは小屋のなかに水をもつていきました。母親は川にでかけていきました。川はとおい。ごぞんじのとおり、川は野原にあります。さて、わたしは水をもつてきました。わたしが水をもつてくると、父親は小屋の戸をしめて、『わしは馬鹿か。わしは他人のために子をつくつたというのか。それで、わしの仕事はなんだというのか』といいました。さて、父親はわたしをつかまえ、わたしの腰布をはずしました。わたしは冗談だとおもっていました。さて、父親はわたしをたおすと、自分のしたいことをしました。いつも、そのようにしました。母親が川にいくと、父親はわたしにちかづいてきました。さて、こうして、お腹がおおきくなりました。わたしの父親のほか、だれもこのことをしりません」といった。

さて、母親はそれをきくと、自殺してしまつた。娘の母親はたいへんはずかしかつたので、自殺してしまつた。

さて、王さまたちは、「それではいきなさい。子どもをうんだら、それでよい」といった。

さて、お腹に子どもをはらんだ娘には見さんがいた。

さて、兄さんはとおい村で仕事をしている。

さて、兄さんはたちあがり、やってきた。くると、「なんだって、母さんが死んでしまったと。おまえさんたちはわたしにそれをしらせてくる。それはどういうことか。おまえも、不信心ものよ。おまえはどうして、お腹がおおきくなったのか」という。(娘がその理由を見さんにいう。) 兄さんは、「なんと」といった。

さて、村のなかで、兄さんは人びとが父親について、「この話はこういうことになった。はずかしいことだ」というのをきいた。兄さんは、「父親をそのままにしておくわけにはいかない」といった。

さて、兄さんは父親をころしてしまった。父親をころしてしまつた。娘はにげていき、川にいき、川をわたつて、向こう岸にいき、子どもをうんで、そこにおちついた。娘はかえつてきていない。

さて、この話はこのようにしておわつた。これでわかるとおもうが、この世の欲とゆうのは、ひどいものだ。たとえ、ちいさくても、性欲、お金ほしき、食欲などは、人をはずかしめる。アツラーよ、どうか人びとがみじめなおもいをしないようにしてください。

(一九八三年一月二二日、語り手 サリー・ジーカ、ガウンデレにて)

208 必要のないことをする男とヘビ

ちいさなお話、ちいさなお話。

さて、ある男には財産がなかった。子どもとたべるのものが、なにもなかった。

さて、男はウマをつれて、どこかにいつてしまふといった。男は財産をもとめて、いく。男がいくと、道にヘビがよこになつていった。

さて、ヘビは男に、「どこにいくのか」とたずねた。男は、「わたしは、子どもたちとたべていくための財産をさがしていく」といった。

さて、ヘビが、「わたしの首をもちあげなさい、おまえさんがたべていくものを手にいれることができる」という。男はヘビの首をもちあげ、黄金を二個とつた。男は黄金をとり、それをお金にかえた。男はそれをお金にかえると、屋敷をつくり、よめさんをもらつた。

さて、男はいつて、そのヘビをころさなければならぬといつた。男は残りの黄金をとるのだといった。ある人が畑をたがやしている。

さて、ヘビはいくと、「あそこからウマにのつてやつてくる男はわたしをころそうとしてゐる。わたしをかくしておくれ。あの男が

いってしまったら、わたしはそとにでる」という。

さて、農夫は、「わしはおまえさんをどこにかくすのか」という。ヘビは、「口をおおきくあけなさい。わたしはそのなかにはいる。あの男がいつってしまったら、そとにでる」という。農夫はおおきくあけた。ヘビはなかにはいった。男はやってきて、ヘビをさがしたけれど、さがしだせなかった。男は畑の持ち主にたずねた。畑の持ち主はみえていないといった。男はいつってしまった。

さて、農夫はヘビにでるようにといった。ヘビは、「とんでもない。わたしにでるといふのか。わたしはたべるものを手にいれた。それなのに、でるといふのか」といった。畑の持ち主はすわって、ないている。

さて、ヘビクイドリがやってくると、畑の持ち主がいた。ヘビクイドリは畑の持ち主に、「どうしてないのか」という。農夫は、「わたしはヘビとこういふことをした。ヘビはそとにでないといった」といった。ヘビクイドリは、「よろしい。よこになりなさい。おまえさんの口をおおきくあけなさい。ヘビが日の光にあたらうとしてやってきたら、ヘビをそとにだしてやろう」という。農夫はよこになり、口をおおきくあけた。ヘビが頭をだした。ヘビクイドリはヘビをのみこんでしまった。

さて、ヘビクイドリは、「ヘビはすこしばかりおまえさんの体にあったものをたべた。おまえさんはいつて、ニワトリをかい、ころ

して、たべなさい」という。

さて、農夫は、「ニワトリがおまえさんよりいいというのかい」というと、ヘビクイドリをつかんだ。農夫はいくと、よめさんにヘビクイドリをつかまえておいてくれという。よめさんは、「ヘビクイドリはおまえさんをすくってくれたのに、ころすというの。はなしてやりなさい。いかせてやりなさい」といった。農夫は、「つかまえておいておくれ。わしは油をかいにいく」といった。よめさんは夫のためにヘビクイドリをつかまえている。夫は油をかいにいく。

さて、よめさんはヘビクイドリに、「いつてしまいなさい」といった。ヘビクイドリはとんでくると、農夫のよめさんの目を一つをとって、それをもつてとんでいったとさ。

お話はみじかく、わたしの命はながい。お話は、おしまい。ニワトリの糞の蒸し焼きができた。ひよつとしたら、ウサギはやせて、わたしはふとる。草の茎はうずまる。わたしはそとにでる。

(一九八三年一月二五日、語り手 ハッジャ・デッポ・マンガ、
ガウンデレにて)

209 フルベ族の男とヘビクイドリ

フルベ族の男が旅にいくとき、やってくるると、地面をほったあとのような水たまりがあった。だれでも、やってくるると、そこをたびこす。男はやってくる、ぬかるみに足をとられてしまった。

さて、男はやってきて、ぬかるみに足をとられ、そこからでられなかった。ながいときがたち、体はやせおとろえ、もうすこしで、死ぬところだった。

さて、ヘビクイドリがやってくると、男がいた。ヘビクイドリは、「もし、おまえさんを泥のなからひっぱりだしてやったら、おまえさんはわたしにどんなお礼をしてくれるのか」という。男は、「それなら、わたしはおまえさんの善意にむくいよう。わたしは死にかけている。おまえさんがわたしをひっぱりだしてくれるというのに、お礼をしないということがあろうか」という。ヘビクイドリは男に、「よろしい」という。ヘビクイドリは男をひっぱりだして、高みにたたせた。ヘビクイドリは男をたたせた。

さて、ヘビクイドリは男に、「いまから、いって、ニワトリを七羽さがしなさい。それをたべるのだ。たべたら、おまえさんの体はよくなるだろう」という。

さて、男は手をのばし、ヘビクイドリの足をつかんだ。男はヘビクイドリに、「わたしは六羽目をさがしてあてた」という。ヘビクイ

ドリは、「七羽目はどこにいるのか」といった。男は、「わたしはおまえさんからくいはじめるといふ。ヘビクイドリは男に、「文句はない」といふ。

さて、男が油断していると、ヘビクイドリがちかづいてきて、男の目をつついた。男はヘビクイドリをはなした。ヘビクイドリはどこかにとんでいってしまった。

さて、男の両目はつぶれてしまった。ヘビクイドリはどこかにいってしまったとき。

(一九九三年、語り手 ルーティ・センベ・ラーム、レイ・プーバにて。ルーティは六五歳。ルーティの父親はフルベ族。母親はチョッリーレのガルケ族。ルーティはチョッリーレのさきにあるタパーレ村でうまれる。この話は子どもとき大人たちたちからきいたという)

210 どうして友だちの友情をみわけたか

(ある若者のところに三人の若者たちがあそびにやってくる。若者はその三人のうちいちばん自分をすいてくれているものがだれかわからない。)

さて、若者は母親のところについて、「ぼくには、ぼくをすいてくれている人たちがいる」といふ。母親は、「よろしい。おまえに

おまえをすいてくれる人ができたか」という。若者は、「ぼくをすいてくれている人たちができた。生みの親である、母さんより、あの人たちはぼくのことをすいている」といった。母親は、「おまえは、うそをついている。三人とも、おまえをすいているはずがない。いつておく。晩御飯をたべてしまうと、ふとらせた雄ヒツジを手にいれて、七ヶ月ほどかいなさい。七ヶ月たつと、その雄ヒツジをつかまえなさい。みんながねしずまつたら、その雄ヒツジをつかまえて、ころしなさい。おまえのよめさんをベッドのむこうにおらせなさい。友だちのところにいき、だれそれとだれそれとだれそれをよび、おこしなさい。友だちが、「どうしたのか」といえば、『べつにどうしたというのではない。きょう、自分はよめさんをころした』といいなさい。それで、もう一人のところにいき、おこし、『きょう、自分はよめさんをころした。ほらこれがよめさんをころした短刀だ』といいなさい。(若者は母親にいわれたように、雄ヒツジをかって、それをころし、よめさんをベッドのむこうにかくし、友人たちのところにいく。)

さて、若者が最初にいった友は、「ぼくは、まえからきみのよめさんが気にいったので、きみのところにいった」という。若者たちは三人いる。母親に相談したのは、四人目の若者だ。若者が最初にいった友だちは、「ぼくは、まえからきみのよめさんが気にいったので、きみのところにいった」といった。二番目の友だち

は、「ぼくは、まえからきみの家の食べ物が気にいったので、きみのところにいった」といった。三番目の友だちは、「だれそれよ、どうしようか」といった。若者は、「どうしようもない」といった。三番目の友だちは、「にげよう。アツラーにかけて、イスラム教の徳にかけて、ぼくらの友情を信じるなら、にげよう」といった。

さて、若者は、「ぼくはにげない」といった。三番目の友だちは、「よろしい、だれそれよ、きみがにげないというのなら、ぼくらをつかまえようとするものをみんなころそう」という。

さて、若者は、「よろしい」という。まえから若者のよめさんが気にいったといった友だちはたちあがり、王さまのところにいった。「だれそれさま、ニュースです。だれそれはよめさんをころしました。よめさんをころすときにつかつた短刀も、わたしにみせてくれました」といった。まえから若者の家の食べ物が気にいった友だちは、若者のよめさんのつくる食べ物がすきなだけだった。

さて、三人目の友だちは若者に、「だれそれよ、ぼくはきみとつしよにいく。ぼくは、きみをほっておかない」といった。若者は、「それでは、こい」といった。二人はあるいていった。若者は、「わかるな、よめさんはよこになつてゐる。死体に腰布をかぶせておいた。血をみたな」といった。友だちは、「みた」といった。若

者は、「そうか、みたか」といった。友だちは、「だれそれよ、それでも、いこう。アッラーにかけて、いこう」といった。若者は、「いやいかない」といった。友だちは、「なんだって、いかないのか」といった。

さて、若者は、「だれそれよ、ぼくがころしたのはよめさんではない。雄ヒツジをころしたのだ」といった。

さて、友だちは胸に手をやった（それをうけいれられなかった）。

さて、友だちはころんでしまった。友だちはおこっていたからだ。

さて、二人は、雄ヒツジをもつていき、皮をはいだ。

さて、二人は雄ヒツジの皮をはぎ、よめさんは雄ヒツジをとると、料理しはじめた。夜明けどきになった。べつの若者は王さまのところにいき、「ニュースです。だれそれは、よめさんをころしました」という。夜明けどき、王さまの家のものがやってきて、男の屋敷をとりかこんだ。

さて、「平安、なんじらにあれ」というと、王さまの家のものたちがやってきた。屋敷の主人は、「なんじらに、平安あれ」といった。

さて、王さまの家のものが、「おまえは、大罪人だ。おまえは自分のよめさんをころした。きょう、おまえはつかまった」という。若者は、「だれが、わたしのよめさんをころしたといたのか」と

いった。王さまの家のものが、「まちがいなく、おまえは自分のよめさんをころした。まちがいなく、おまえは自分のよめさんをころした」といった。若者が、「わたしがころしたというのか」という。王さまの家のものが、「おまえがころしたのか」という。若者が、「わたしは、おまえがころしたというのか」という。王さまの家のものが、「おまえがころした」という。若者は、「わたしがころしたというのなら、くることがよい」という。王さまの家のものが、「わしらはいかな。おまえをつかまえるだけだ」という。若者は、「おまえさんたちは、ころされた人を見ていない。おまえさんたちはわたしをつかまえても無駄になる。きなさい」という。王さまの家のものたちがやってきた。夜明けどき、王さまの家のものたちがやってくる、若者のよめさんがいた。若者たちはすわった。よめさんが料理をし、若者たちはそれをたべた。

さて、王さまの家のものたちはおちついた。おちつくと、王さまの家のものたちは、王さまのところに若者のことをうったえた男のところにいき、その男をつかまえた。その男をつかまえると、王さまのところに連れていった。王さまは、「その話はおわっていない。その女をみなければ」といった。夜が明け、朝になった。王さまの屋敷のまえに、たくさんの家来たちがあつまった。家来たちがあつまり、若者をうったえた若者がすわっている。若者をうったえた友だちが、「まちがいなく、この人はよめさんをころしました。わた

しは、よめさんがよこになつてゐるのをみました。よめさんをころした短刀をみせてくれました。わたしは血をみました」といった。王さまは若者に、「このものが、うそをついていないか」といった。王さまの家来たちがあつまつた。王さまの家来たちが若者をつれてきた。よめさんもちあがり、やつてきた。王さまは、「よめさんは、一人もつてゐるだけか」という。若者は、「この人はわたしのよめさんです。この村の人はみんなわたしがよめさんを一人もつてゐるのをしています」という。王さまの家来たちは、「この人はこの人のよめさんです。その人です」という。若者が、「よろしい、わけがあつて、よめさんをころすまねをしました。というのは、こうです。わたしには、三人の幼友がいて、わたしをすきだといいました。わたしは母親のところにいきました。わたしは母親に、わたしをすいている人がいて、わたしの生みの親より、自分をすいているといいました。そこで、母親が、その三人みんながわたしをすいていない、一人はわたしの家でたべてゐるものをすいている、一人は、わたしのよめさんをすいている、一人はわたしをすいているといいました。母親はわたしに、雄ヒツジをつかまえ、その雄ヒツジを友だちにみせず、それをころし、真夜中、友だちのところいき、友だちに雄ヒツジをころしたときにつかつた短刀をみせなさい」といきました。そういうことです」という。

さて、王さまの家のものは、若者をうつたえた若者をつれてい

き、ムチでうち、牢屋にいれとさ。この話は、こういうこと。

(一九六四年九月、語り手 ウォダーベ・ホントルベ氏族のもの、ガウンデレ地方のヤルパンのちかくにあるババ村にて)

211 ムサーダとムンカーラ

二人の子どもがいた。二人は友だちだった。一人の名前はムサーダという。もう一人の名前はムンカーラという。二人は子どものころから、おおきくなるまでいっしょだった。

さて、ある日、ムンカーラは病氣になつて、小屋のなかでねてゐる。

さて、二人はいつもいっしょにコーラン学校に行く。

さて、ムサーダはムンカーラのところによつてくる。ムサーダはムンカーラの屋敷の入り口の小屋のところによつてきて、たちどまつて、いう。

「ムンカーラよ、ムンカーラよ。」

きみの体はどうだ」

それをうけて、ムンカーラがいう。

「ぼくの体はよくなつた」

ムサーダはそこをとおりすぎて、コーラン学校に行く。そのつぎの日も、そこをとおりすぎて、学校に行くときに、いう。

「ムンカーラよ、ムンカーラよ。

きみの体はどうだ」

それをうけて、ムンカーラがいう。

「ぼくの体はよくなつた」

とうとう、ある日、ムサーダがやってきて、いった。

「ムンカーラよ、ムンカーラよ。

きみの体はどうだ」

なんの返事もなかった。ムサーダはつづける。

「ムンカーラよ、ムンカーラよ。

きみの体はどうだ」

なんの返事もなかった。ムサーダは入り口の小屋にはいつていた。そこにはだれもいなかった。ムサーダは屋敷のなかにはいつた。

さて、ムサーダは、「ムンカーラは死んでしまった」といわれた。

さて、ムサーダはムンカーラの墓がどこにあるかおしえてほしいといつた。

さて、ムンカーラの家族はムサーダに墓のあるところをおしえた。ムサーダは墓のあるところにいつた。ムサーダはいう。

「ムンカーラよ、ムンカーラよ。

アツラーのゆえ、預言者のゆえ、

ぼくに戸をあけておくれ」

さて、墓がひらいた。

さて、ムサーダはそのなかにはいつた。ムサーダはいう。

「ムンカーラよ、ムンカーラよ。

アツラーのゆえ、預言者のゆえ、

ぼくに戸をしめておくれ」

さて、墓はしまった。

さて、二人はそこにいたとき。

お話のみじかく、わたしの命はながびく。

(一九八三年一月二三日、語り手 ハディージャ・ブーバ、ガウ
ンデレにて)

212 わるい兄とその弟

ある兄弟のうち兄さんがある娘と結婚した。兄さんは娘と結婚した。でも、弟は兄さんよりうつくしかった。弟は兄さんよりきれいだったが、兄さんは娘と結婚する。兄弟とよめさんはいつしよにすんでいる。

さて、女は弟とねなければいつた。弟は、「とんでもない、母親がおなじ兄さんがおまえさんと結婚したからには、おまえさんとねるわけにはいかない」といつた。弟はそれをこぼんだ。いつも、兄さんは野原にでかけていつた。

さて、女はムチをとると、自分の体をたたいた。女の体ははれた。兄さんがかえつてくると、やってきて、「おまえの体はどうしたのか」とたずねた。女は、「あなたの弟がわたしとねたいといいたけれども、わたしはそれをことわった。弟はわたしをたたいた」といった。ほんとうのこと、女は自分で自分の体をたたいたのだ。

さて、兄さんはやってくる、弟をつかまえ、さんざんたたいたあと、弟のペニスをとると、きつて、すててしまった。兄さんは弟をほつておき、どこかにいつてしまった。

さて、弟はきられたペニスをとった。弟は自分の幼友だちといっしょにどこかにいつてしまった。弟と幼友だちはほとんどんあるいつて、木とうとう、二人はある村にいつた。弟はいくと、木にのほつて、木のうえにすわつた。この村の王さまの娘は娘と結婚するためにやつてきた男をすべてみにくいから、いやだといふ。やつてきた男をすべてみにくいから、いやだといふ。

さて、若者はやつてきて、木にのほつて、すわつてゐる。王さまの娘たちがやつてきた。娘たちがやつてきた。結婚してよい年頃の娘たちがいくらでもいた。娘たちは水浴びをしにやつてきた。

さて、若者の血が若者のすわつてゐるところから、娘があんでゐる草でできた盆のうえにおちていく。血がおちていく。

さて、娘は、「一体、このうえにはなにがあるのだろうか」といつ

た。

さて、娘がみると、若者がすわつてゐた。娘は、「きょうこそ、わたしはわたしの夫を手にいれた。わたしは夫を手にいれた。わたしは夫を手にいれた」といつた。娘はいくと、自分の父親にそのことをはなした。娘はきょう、むこさんを手にいれたといつた。父親は、「その男はどこからきたのか」といつた。娘は、「わからない。川のそばにゐる」といつた。王さまの家のものたちがやつてきて、

若者を木からおろし、娘の父親のところにつれていつた。娘の父親は若者を見て、「ああ、なんときれいなことか」といつた。父親は娘に、「よろしい。おまえがすきなことから、この人はおまえのむこさんになる。おまえはおおきくなつたのに、男たちをこぼんできた」といつた。王さまは若者と娘に屋敷をやつた。王さまの家のものたちにつて、その屋敷をきれいにさせた。屋敷はすっかりきれいになつた。王さまの家のものはウマをつれていつて、つないでおいた。王さまの家のものたちは、わかい女奴隷たちをそこにやらせた。王さまの家のものたちは、屋敷にいき、そこにゐるいろな家財道具をいれた。若者と娘は結婚した。若者はその屋敷にいき、そこにいた。娘はその家に嫁入りしてきた。よめさんはすつとすんでゐる。とうとう、村の人たちが、「あの人は男かな。よめさんはなんの声もあげない。あの人は男か。よめさんはなんの声もあげない。あの人は男か」といつた。

さて、村の人びとが、「王さまの指輪が池におちた。あす夜があげると、村のものはすべて下着をつけずに池にいき、水のなかにある指輪をさがしだすのだ」といった。

さて、若者のウマがいなないた。ウマは若者に、「わたしがいなないたら、きてください」といつていた。ウマは夜、いなないた。若者がでていくと、ウマがいた。ウマは、「わたしの背中のにりなさい。わたしはあなたをつれて、でていきます。あす、村の人たちはあなたをころします」といった。よめさんはねている。ウマは若者にくるようにといった。ウマは若者を大切にしている。若者はやってくる、ウマにのり、どこかにいつてしまおうとする。ウマはいくと、若者をその村からだそうというわけだ。若者は、「よろしい」といった。若者はやってくる、ウマに馬具をつけた。ウマはいなないた。若者は小屋からでた。若者はやってくる、ウマに馬具をつけた。若者はウマにまたがつた。若者はウマにのつて、村からでて、どんどんすすんでいった。若者とウマがいくと、草原に精霊たちがあつまつていて、火をもやし、煙をだしていた。精霊たちは大声をあげた。若者はそこについた。精霊たちが、「夜に、おまえさんはどうしてここにやってきたのか」といった。若者は、「わたしにこういうことがおこった。あす、わたしはころされる。わたしのウマがわたしをこの地方のそとにつれていつてくれるといったのだ」といった。精霊たちは、「それは、簡単なこと」といった。

さて、精霊たちは若者をのみこんで、はきだした。若者はそとにでた。(体はもとどおりになつただけでなく)まえよりずつと、きれいになつていた。若者はいろいろなものをもって、でてきた。なにもかも、手にいれた。手にいれた。若者はもどつてきた。ウマは、「もどりましょう」といった。若者は屋敷にかえつてきた。若者は小屋にはいつた。夜はまだあけておらず、よめさんは目をさまさず、ねたままだつた。若者は屋敷についた。夜があけて、朝になつた。王さまは太鼓をたたかせた。王さまは川にいき、すわつて、村人たちがやつてきて、若者をころそうとまっている。

さて、若者は屋敷にかえつてきた。屋敷にかえつてくると、若者はよめさんをだいた。若者はよめさんをすっかりつかれさせた。若者はよめさんをはなした。若者はおちついた。夜があけて、朝になつた。村の人たちはみんな川にいつた。村人たちは川に王さまの指輪をさがしにいつた。村人たちはバシヤバシヤ水のなかでさがしている。村人たちが、「よそものはこないのか。よそものはこないのか。よそものはこないのか」とたずねた。日がすこしあがつた。若者は小屋からでて、ウマに馬具をつけて、ウマにまたがつた。若者はどんどんすすんでいつた。若者は川にちかづく、ウマからとびおり、パンツをぬぎすてた。若者は下着をつけず、川にいく。若者は、「ペニスをとりもどした。ペニスをとりもどした。ペニスをとりもどした。ペニスをとりもどした」という。

さて、若者は屋敷にかえってきた。屋敷にかえってきた。王さまの屋敷では女たちが調子をあわせて、ウスをつく。女たちはトウジンビエと砂糖と蜂蜜をあわせてつく。若者はいろいろなものをもつていった。精霊にもらわないものはなかった。若者はもつていけるものはすべて、王さまの屋敷にもつていかせた。もう、川にいかにくてもよかつた。若者とよめさんは結婚したままだった。

さて、よめさんはみごもり、子どもをうむ。よめさんはみごもり、子どもをうむ。とうとう、あるとき、若者の兄さんは野原にはいり、弟をさがした。とうとう、兄さんはこの村にでてきた。王さまが死んでしまい、若者は王さまになった。村人たちは若者に王さまになってもらうといった。よめさんは、自分の夫に王さまになってもらうといった。村人たちは若者を王さまにした。若者の兄さんが村についた。頭の毛はのび放題。野原にながいあいだいたからだ。王さまの家来たちが王さまに、「よそものが屋敷のまえにやってきました」といった。王さまは使いのものに、「よそものがくるように」といわせた。よそものがやってくると、王さまは、「この人はわたしの兄さんだ」といった。そういうことになった。

さて、王さまは兄さんの毛をそるようについた。王さまの家のものたちは王さまに兄さんの髪の毛をそって、きれいにした。王さまは兄さんを大臣にしたとき。

お話は、おしまい。

(一九八三年一月二六日、語り手 アスタ・ジョーダ、ガウンデレにて)

213 フルベ族は意地悪な袋

わたしは意地悪の話を書いたことがある。すなわち、フルベ族の男は意地悪な性格をカヌリ族のところで手にいれた。

さて、フルベ族の男とカヌリ族の男が市場にいった。市場はとおかつた。家にかえつてくるとき、雨がふつた。

さて、川には水がいっぱいだった。カヌリ族の男は川をわたりきつた。フルベ族の男は、わたりきろうとした。ところが、カヌリ族の男はフルベ族の男を川のほうへおした。フルベ族の男は荷物もろとも、川におちた。男は、すこし、ながされ、岸にはえている草をつかんだ。カヌリ族の男がやってきて、その草をきりおとした。フルベ族の男は川にもどつていき、またしても、しずみかけた。フルベ族の男は、草をもつた。カヌリ族の男は草をきってしまった。

さて、フルベ族の男は一生懸命になって、必死のおもいで、川をわたつた。男はカヌリ族の男に、「友よ、おまえさんはわたしになんといいことをしてくれたのか」という。カヌリ族の男はフルベ族の男に、「それは意地悪というのだ」といった。フルベ族の男は、「それをわたしにうっておくれ。いくらするのか」といった。カヌ

リ族の男はフルベ族の男に、「雌ウシ一頭だ」といった。フルベ族の男は、「よろしい、それをかう」といった。

よろしい。それからながいときがすぎさった。フルベ族の男は、雨がふっても、ふらなくても、川をわたるとき、そこにやってきて、カヌリ族の男がやってくるのを待ち伏せしている。

あるとき、雨がふった。フルベ族の男はいそいで、荷物をもって川をわたった。カヌリ族の男がやってくる。わかるな。カヌリ族の男はまえのことをわすれてしまっている。カヌリ族の男が例のところにやってきた。カヌリ族の男は、荷物をもったまま、川をわたろうとして、水で苦労している。そこで、カヌリ族の男は草をつかまえた。フルベ族の男はその草をきる。カヌリ族の男はべつ木をつかむ。フルベ族の男はそれをきってしまう。カヌリ族の男の荷物はながれていってしまった。

さて、フルベ族の男はいそいで、もどっていき、家にかえった。フルベ族の男はカヌリ族の男の家に行った。フルベ族の男はそこにいた人たちに、「だれそれは、死んだではないか。でも、死にかけたとき、あの人は、わたしに、家にかえってくると、おまえさんたちにあの人の雌ウシをあの人のためにころして、施し物にするようにといった」という。人びとは、「だれそれは、死んだ。だれそれは、死んだ」と大声をあげている。

さて、人びとは雌ウシをつかまえて、ころす。人びとが雌ウシを

ころして、皮をはいでしまうと、カヌリ族の男が自分の家にかえってきた。カヌリ族の男は、みんなに、「どうしたのか」という。人びとは、「だれそれが、わたしたちにおまえさんが死んだといったのだが。だれそれというフルベ族の男だ。あの人は、おまえさんが死んだら、わたしたちはおまえさんの雌ウシをころして、施し物にするのだといった」という。

そういうわけだから、カヌリ族はフルベ族を、「タタ・キリウエ（イヌの子よ）、プラタ・アンガル・バー」などといって馬鹿にする。プラタ・アンガル・バーとは、カヌリ語で、「フルベ族は注意力がない」という意味だ。

さて、わたしは、このように「フルベ族は意地悪な袋」という表現のいわれをきいた。でも、カヌリ族は自分たちのところから、フルベ族が意地悪な性格をもらったということをうけいれない。それは、けつしてうけいれない。

(一九九〇年二月一九日、語り手 ウスマーンヌ・パツバワがケイ二村にて)

214 フルベ族がよいというのなら、サルにきけ

ある村は野原にあった。村が野原にあり、村人のなかにフルベ族の男がいた。

さて、村の人たちは相談をして、どこかにうつってしまい、フルベ族の男をそこにほっておいた。男は村人たちについていけなかった。力がなくなってしまうのだった。村人たちは男を村にほっておいた。

さて、サルがやってくると、男がいた。サルは男に、「どうしたのか」といった。男は、「村人たちがどこかにうつっていき、わたしをほっておいた。わたしは村人たちがどこにいったのかわからない」といった。

さて、サルは男に、「おまえさんをどこかの村につれていってやったら、おまえさんはわたしにお礼をくれるか」という。男は、「おまえさんがわたしを人のいるところまで、わたしをほっておいた人たちのいるところまで、つれていってくれるというのに、わたしはおまえさんの善意にお返しをしないだろうか。おまえさんにお礼をする」といった。サルは男をおぶった。サルはどんどんあるいていく。サルは、一日がおわり、夜になり、朝になるまであるいた。サルはあるいた。

さて、サルと男は村についた。サルは木にのぼって、男に、「ほら、そこに村がみえるな」といった。男は、「うん。みえる。ここで、わたしをまっついておくれ。もどつてきて、おまえさんの善意におかえしをしよう」といった。サルはじっとしていた。男は村にいった。男は、「だれか、足のはやいイヌをもっているものがある

か」とたずねる。村人たちは男に、「いる」といった。男は、「わたしにそのようなイヌをかしておくれ」という。

さて、村人たちは男にイヌをかしてやった。男はそのイヌをつれた。男はイヌのさきをあるいていった。イヌのさきをあるいて、どんどんすすんでいき、サルのところについた。男はイヌに、「かれ」と合図をした。イヌはやつてきて、サルをつかまえた。サルは必死のおもいで、にげきつた。フルベ族の男はサルの善意にたいするお返しをしたつもりなのさ。

(一九九三年、語り手 ルーティ・センベ・ラーム、レイ・ブーバにて。ルーティは六五歳。ルーティの父親はフルベ族。母親はチョッリーレのガルケ族。ルーティはチョッリーレのさきにあるタパーレ村でうまれる。この話は老女たちからきいたという)